台湾・フィリピン・パラオにおけるパヤオ漁業・キハダ産卵生態調査

鹿熊信一郎

本調査は，平成12年度科学研究費補助金（研究課題名：大水深海域における次世代型の海洋牧場の創出と人工湧昇流発生構造物の開発・実証，研究代表者：琉球大学工学部環境建設工学科 仲座栄三）の一環として実施した．

調査の目的：パヤオ漁業の成立要因，持続的発展の要因を多面的に把握するとともに，主要対象魚類の生態・資源構造についての知見を得るため，パヤオ漁業が相当発達したフィリピンおよび発達初期にある台湾，パラオの状況と沖縄の状況を比較するとともに，今後も情報交換を継続できるパイプを形成する．

調査期間：2001年2月22日～3月4日

調査結果：パヤオの設置数は，台湾が6，フィリピンが4000～5000，パラオが5だった．台湾では，これまでパヤオはそれほど重視されてこなかったが，今後設置数が増える可能性がある．フィリピンでは，資源管理を含めた漁業の管理（特に設置数管理）を強化する必要性が生じていた．パラオでパヤオの設置状況が安定しないのは，主に政府の財政力に起因していると考えられた．（同タイトルの報告書を琉球大学に提出した．）